

説教 『聖霊と服従』山本 護 牧師
聖書 ミカ書 7：6～7／ルカによる福音書 12：49～53

「あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ(ルカ 12:51)」。えっ、聞き間違いじゃないのか、と訝しんでしまうイエスの言葉。この物騒な自己表明は何を意味するのか。イエスは時々、人間の深部を見通して恐ろしいことを言う。

イエスは女性の「信仰、救い、安心」を宣言した。香油でひと悶着起こした女には「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい(7:50)」と送り出し、12年間婦人病で苦しんだ女にも「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい(8:48)」と告げた。また男の弟子には「どこかの家に入ったら、まず〔この家に平和があるように〕と言いなさい(10:5)」と命じ、「平和」の使者として遣わした。イエスの言葉やふるまいには、安心や平和、救いや希望の空気が総じてあった。

ところがここでは、「そうではない。むしろ分裂だ(12:51)」とか、「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである(12:49)」と剣呑なことを言う。これをどう受け止めればいいのか。イエスは「父は子と、母は娘と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる(12:53)」と何より信頼できるはずの家族に対してまるで容赦がない。預言書にもこれと似た記述がある。

「息子は父を侮り、娘は母に、嫁はしゅうとめに立ち向かう。人の敵はその家の者だ(ミカ 7:6)」。預言者の言葉とイエスのそれを重ね見ると、うっすら分かりかけて来る。「今から後、一つの家には五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれる(ルカ 12:52)」。家族はあらゆる集団の原形。たとえ親密であっても、いや親密であるほどに拘束し合う。とはいえ自由を尊ぶ家族や集団もある。だがキリストへの服従はそれ以上だ。教会という「家族」が、キリストへの服従を最優先にするなら、「家族性」の拘束を超える人間集団になろう。そうでなければ、教会という家族は囚われの獄となる。

「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである(12:49)」。「火」とは聖霊。洗礼者ヨハネはイエスのことを「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる(3:16)」と言った。聖霊は燃える命。「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまる(使徒 2:3)」ゆえに集団の拘束や小市民的な願いを超える。聖霊を受けた者は各々自らの言葉(2:4)、すなわち真の主体性を獲得する。聖霊の力によって「父は子と、母は娘と、しゅうとめと嫁は対立して分かれる(ルカ 12:53)」。優先すべきは人間関係ではない。イエスが「地上に投ずる火(12:49)」によって立ち現われるその人自身なのだ。

「人の敵はその家の者だ(ミカ 7:6)」。絶望の預言は希望に転換する。「しかし、わたしは主を仰ぎ、わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる(7:7)」。真の希望を、私たちは挫折と幻滅の中で祈りながら待ち続ける。それは、期待通りの結果ではないかもしれない。だが、そこにおいて、「わが神は、わたしの願いを聞かれる」。このことこそが、私たちにとっての真の救いなのだ。

「しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむだろう(ルカ 12:50)」。真の救いの底部に、十字架という途方もない犠牲があることを忘れてはならない。



【おまけのひとこと】

家内安全 無病息災 祈願成就 こうした素朴な祈り 祈りの達成率を看板にした信仰がある
看板が打ち砕かれ 功利と虚栄が取り除かれる時 人は痛む だが 打ち砕かれた爽やかさが勝る